

「札幌くらぶ」のなすべきこと

札幌くらぶ会長 上田文雄

♪ 札幌くらぶの原点を
確認しよう

私はこの一年半にわたり厄
 な病魔に見舞われ、ギターで札
 響を聴くことができず、不本意
 ながら札幌くらぶの運営にも役
 割を果たせなかった。体調回復
 半ばではあるが、久しぶりに5
 月定演・井上道義さんのラスト・
 ボレロと、6月のデュトワに代
 わる尾高さんの「新世界」を聴
 けた。両定期ともギター大ホー
 ルは満席、両マエストロの渾身
 の名演に対する万雷の拍手が響
 きわたるギターは、その素晴ら
 しい音響機能を存分に発揮、2
 000余名の聴衆は感動を共有
 する素晴らしい空間に身を置
 き、幸福感を味わえたに違いな
 い。私も病床でモーツァルトと

フォーレのレクイエムを交互に
 繰り返し聴いて心の安定を図っ
 た日々を思い起こしなことが
 ら、生きる喜びを実感できた。

♪ 札幌を愛する」とは

音楽の力を信じ、札幌の奏で
 る音が市民に染みわたる、この
 街に豊かな文化が形成されるこ
 とを目的に札幌くらぶの活動は
 始まった。

♪ PMFとSコラボが
示す「札幌のあした」

しかし私は、札幌が札幌や北
 海道の宝であるにとどまらず、
 世界的に貴重な財産であること
 を広く市民に示すことが大切だ
 と思う。

♪ 札幌くらぶのなすべきこと

札幌には現在12名のPMF
 修士生が在籍し、PMFでの貴
 重な学習体験により創造された
 心と音色と表現技術が札幌サウ
 ンドの根幹を作っていることの
 重要性への気付きが必要だ。そ
 して来期の札幌首席指揮者とし
 てエリアス・グランディ氏が就
 任するというではないか。

グランディ氏は2004年チ
 エリスト、そして2012年は
 指揮科でファビオ・ルイーダの
 指導をPMFで受け、研鑽を重

ね世界的指揮者に成長して札幌
 に帰ってきたマエストロであ
 る。私は彼を加えて札幌13(サ
 ーティーン)と呼ぶことにして
 いるが、札幌という街でPMF
 が34年にわたり毎年開催され、
 世界の優れた若き音楽家達が参
 加し研鑽を重ね、やがて札幌で
 活躍するというダイナミックな
 音楽文化形成のウネリ・循環を
 感じ、札幌の発展ストーリーを
 読み取りたく思うのだ。



2024年PMFホストシティ・オーケストラ演奏会から

(写真提供 PMF組織委員会)

9月〜12月 定期演奏会 名曲コンサート

演奏会を楽しく聴くために

八木幸三(札幌くらぶ顧問)

第663回定期演奏会

9月14日(土) 17:00
15日(日) 13:00

指揮 尾高忠明
ホルン ラドヴァン・
ヴラトコヴィチ

R・シユトラウス

13 管楽器のための

セレナーード

この曲の編成は、モーツァルトのセレナーード第10番「グラ・ン・パルティータ」の影響が多分に見られ、フルート、オーボエ、クラリネット、ファゴットが各

2本、ホルン4本にコントラファゴットが加わる13管楽器である。作曲者がまだ17歳のときの作品であるが、指揮者のハンス・フォン・ビューローが、この曲をドイツ各地で紹介したことからR・シユトラウスの名が知られるようになった。その後ビューローの援護もあって、彼は指揮者として、作曲家として大きく飛躍する契機ともなった出世作でもある。

R・シユトラウス

ホルン協奏曲第2番

R・シユトラウスは、2曲のホ

ルン協奏曲を残しているが、第1番は作曲者18歳の時で、この第2番は78歳の作品。実に60年を隔てて作られている。彼の父は優れたホルン奏者だったこともあり、幼いときからホルンはなじみ深い楽器であった。第1番は、練熟と完成度においては巨匠時代の第2番に及ぶべくもないが、溢れる気概と楽想の清新さにおいて独特の魅力を持っている。この第2番は、これまでの豊かな経験を生かして、楽器の巨匠的な技巧を大胆に活用しながら、作曲家特有の抒情性、官能性、明るさ、明快さを内包している。この曲が作られた時期は、第2次世界大戦の末期で勝敗はすでに明らかであった。作曲者はその現実からの逃避からなのか、作曲については「私は仕事をす

るのではない。楽しむのだ」と述べながら、この活気に満ちた作品を作り上げた。

ワグナー

「バルジファル」前奏曲

舞台神聖祝典劇と名付けられたワグナー最後の作品は、世界の叙事詩をもとに、作曲者自身が台本を書いている。キリストの最後の晩餐の際に用いられた聖杯と十字架上のキリストを刺した聖槍をめぐる伝説を扱った物語。純粹無垢な若者バルジファルが、聖杯守護の騎士団の危機を救い、その王になるまでが描かれている。前奏曲は、この作品全体の神秘的な雰囲気を見事に凝縮し、拍の刻みを感じさせない荘嚴な調べに続いて、信仰を象徴する金管楽器が鳴り響く。

ワグナー

ジークフリート牧歌

ワグナーの妻コジマは部屋の外から聞こえてくるすがすがしい調べに目を覚ます。その曲はワグナーがひそかに作曲し、コジマの誕生日のために練習を重ねてきた妻へのプレゼントだった。作曲者は前年にコジマとの間に念願の男の子ジークフリートを得て、彼の喜びが素直に表現され、愛らしく静かな曲想に結晶している。

ワグナー

「タンホイザー」序曲

作曲者中期の作品で、正式な題名は「タンホイザーとヴァルトブルクの歌合戦」と付けられ、禁断の地に行つた騎士タンホイザーと、ヴァルトブルク城でおこなわれたという歌合戦話が結

びつけられている。官能の愛と純粹な愛に引き裂かれ、苦悩するタンホイザーを女性が救う物語は、二つの世界を音楽で明確に描き分けている。序曲は三部分からなり、中央に官能的なヴェーヌスベルクの世界がおかれ、前後に敬虔な巡礼者たちの合唱の音楽が配されている。

上岡敏之



©武藤章

となった第9番は、第8番を完成させた2日後から作曲が開始された。しかし、同時に以前の交響曲の改訂作業もおこなって

第664回定期演奏会

10月19日(土) 17:00
20日(日) 13:00

指揮 上岡敏之
独唱 盛田麻央(ソプラノ)
清水華澄(メソソプラノ)
鈴木 准(テノール)
青山 貴(バリトン)
合唱 札幌合唱団ほか

ブルックナー

交響曲第9番

ブルックナーの最後の交響曲

たため、中断を余儀なくされ、作曲開始から4年後に総譜が書き始められている。しかし、病魔が作曲者を襲い、第4楽章が未完のまま死に至る。死を意識した彼は「曲の完成前に自分が死んだら(ア・デウム)を第4楽章に使って欲しい」と述べたと言われる。昨年のPMFのGALAコンサートで、トーマス・ダウスゴーの指揮により、この曲が補筆完成版全4楽章で演奏されたが、第3楽章までの原典版でも演奏時間は1時間あまりになり、交響曲史上に燦然と輝く大傑作である。札幌とは初共演と



尾高忠明

©Martin Richardson

ラドヴァン

ヴラトコヴィチ



なる上岡敏之が、荘厳な主要主題による滋味深い厳然たる世界観に誘ってくれることだろう。

■ブルックナー

テ・デウム

敬虔な感情に溢れたブルックナー晩年の宗教曲の中でも最高傑作として知られるこの曲は、作曲家の生前に最も多く演奏された作品となった。「テ・デウム」は、「天主よ、われら御身をたたえ」と訳されていて、この訳通り神に感謝の心を捧げる賛歌である。ローマ・カトリック教会では

祝日の朝課で歌われるが、戦争やその他の祝典で、神への感謝の意味をもって用いられることもある。マーラーがこの曲を演奏したとき、終演後聴衆は言葉もなく、動くこともせず、座ったままであった。そして指揮者や共演者が場を去ろうとすると、はじめて喝采の嵐が起ったと伝えられている。盛田麻央をはじめとする独唱陣、札幌合唱団なども加わり、前述のように交響曲第9番の後に演奏されることは、ブルックナー生誕200年記念として、誠にふさわしいプログラムである。



鈴木准



清水華澄



盛田麻央

©MarikoTagashira

© FUKAYA Yoshinobu auraY2



札幌合唱団



青山貴

名曲コンサート
11月9日(土) 14:00
指揮 川瀬賢太郎



川瀬賢太郎

© Y.Fuji

■レスピーギ

交響詩「ローマの噴水」

「ローマの松」

「ローマの祭り」

レスピーギは、その時代にあつては比較的伝統的な書法で作品を書いているが、その精緻なオーケストレーションは、彼の詩的な感性と相まってこの傑作を生み出した。「ローマの噴水」は、噴水を描写しているというよりローマの悠久の歴史を表現しているような壮麗な響きが染しめる。「ローマの松」は(シヤ

ニコロの松)でナイチンゲールの声が録音で流れることが有名だが、前半ではクラリネット独奏が幻想的な世界を創出する。(アッピア街道の松)は、大軍の列が遠くから徐々に近づいてくるような迫力ある盛り上がりで映画「ベン・ハー」をつい想起してしまう。「ローマの祭り」は、大道芸人やイタリアの民俗舞踊が目に浮かぶような描写的音楽が極彩色豊かに奏でられる。

第665回定期演奏会
11月30日(土) 17:00
12月1日(日) 13:00
指揮 エリアス・グランディ
ヴィオラ ニルス・メンケマイヤー

■ヒンデミット

白鳥を焼く男

■マーラー

交響曲第1番「巨人」

20世紀ドイツ音楽を代表する作曲家ヒンデミットは、ロマン派音楽から脱却し、新即物主義に傾倒しながら交響曲、オペラ、室内楽作品など600曲以上を作曲した。自らもヴィオラ奏者であり、この楽器のためのソナタや協奏曲をいくつか残している。この曲もヴィオラ協奏



エリアス・グランディ



ニルス・メンケマイヤー

©Irene Zandel

曲の一つで、「吟遊詩人がやって来て数々の歌を披露する」という趣向で作曲されており、吟遊詩人の役割がヴィオラ独奏に託されている。3つの楽章で構成され、それぞれが中世のドイツ民謡に基づいている。この奇妙な題名は、白鳥の肉を刺した串を回しながら火で焙り焼く人を歌った民謡からとられ、原曲は第3楽章の土台となっている。

ラーヤンがマーラー作品を取り上げ60年代にマーラー・ブームが巻き起こった。札幌も五百回定期の第2番をはじめ尾高忠明によりいくつもの名演を残しているが、今回は次期首席指揮者エリアス・グランディが登場する。この曲は、作曲者が20歳代後半にブタペスト王立歌劇場の指揮者だった頃、5年の歳月をかけて作曲された。元々交響詩としてつくられ標題性の強い作品で「巨人」という題名は、ドイツ・ロマン派の作家ジャン・パウルの同名小説に由来している。

(写真協力 札幌交響楽団)

おおさわたかし
コントラバス奏者 大澤敬さんに聞く

いい演奏をぜひ若い人たちにも



プロフィール

1964年埼玉県生まれ。10歳よりピアノを、15歳よりコントラバスを始める。東京音楽大学附属高等学校を経て東京音楽大学に入学。1987年同校卒業。中博明、松本武全の両氏に師事。1988年ベルリン国立芸術大学入学。ロルフ＝ランケ氏に師事。1991年同校を首席で卒業。この間ダラムシュタット国際現代音楽祭、ベルリン交響楽団、ボリスブラッヒャーアンサンブル等数々の演奏会に出演。同年帰国。フリーランスで数々のオーケストラ等に出演後、1992年札幌交響楽団に入団。1993年には日演連新人演奏会にソリストとして出演。また数々のリサイタル、室内楽演奏会等に出演。札幌交響楽団在籍32年。

ドイツ語の勉強もしていましたが、エキストラや室内楽の仕事が忙しくてなかなか上達しませんでした。ドイツに行けば何とかかなと思っ
ていたし、実際何とかなるんですね。ベルリンでの生活はそれなりに大変でしたが、充実していました。弾く方はもちろんですが、聴く方も楽しくて、毎日

その後ベルリンの壁の様子を見に行きました



コントラバスとの出会い

出身は埼玉県の深谷市、ネギの産地として有名なところですが。小学校4年生の時からピアノは習っていましたが、中学校では合唱が大好きで熱中しました。この時点ではまだコントラバスとは無関係な生活です。

中学校3年生になり、進路を考えた時に、音楽科に進みたいと強く思いました。合唱も頑張っていました。音楽を聴くのも大好きだったので。東京音大付属高校のソルフエージュの先生を紹介してもらい、ピアノを聴いてもらったところ、全く入れるレベルにはないと言われてしまいました。仕方がないので、合唱の経験を生かして歌で

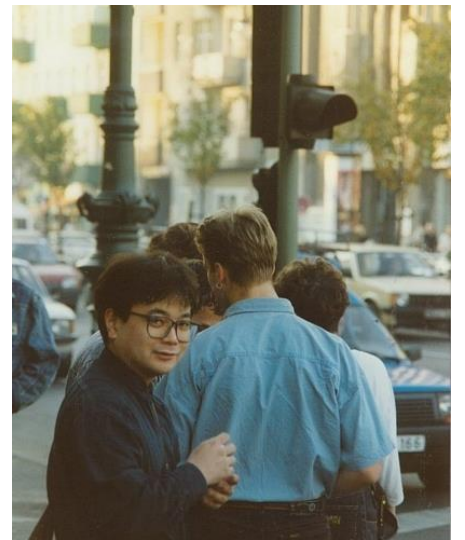
入ろうかと思っていたところ、コントラバスをやらないかと逆に勧められました。オケのメンバーが足りないから入れるかもしれないということで、先生を紹介してもらい、コントラバスを習い始めました。この流れで、始めてから半年ほどで合格したわけです。ラッキーでした。

でも、その分入学してからが地獄でした。何も弾けないので仲間のレベルについていけず困りました。オケでは正しい音が出せず、前にいるヴァイオリンやチェロの連中が怪訝な顔で振り返るような有様。それから1日7、8時間必死に練習をし、1年後には上達して楽しくなっていました。卒業演奏会でソロを弾くまでに上達したのです。

ベルリンで勉強したい

そのまま大学まで進み、留学も検討し始めました。中学の時に東京で聴いたカラヤンとベルリンフィルの演奏が忘れられず、いつかベルリンで勉強したいと思っていたのです。

どうしてもベルリンの大学に行きたくて、先生に直接手紙を書きました。日本語で書いた手紙をドイツ語の先生に翻訳してもらったのです。演奏を録音したカセットテープを送るなどして、試験を受けることができ、何とか入学を認められました。



待望のベルリンに到着

のようにオペラやオーケストラの演奏会に出かけました。後ろの立見席は安く入れたし、音も良かったのです。秋の音楽週間時には世界各国からいろんなオケがやってきます。アメリカの有名どころや日本のオケも聴きました。やはりベルリンフィルとウィーンフィルがよかったです。

歴史的な事件が！

留学最後の年にベルリンの壁崩壊という歴史的な事件がありました。現地にいる私たちは、特に変わりなく生活していたので、日本からの連絡で初めて知ったくらいでした。すぐには現場を見に行ったりしませんでした。

大学は首席で卒業しましたが、これは5段階の一番上の評価をもらったということで、首席は自分だけではなく、たくさんいました(笑)。

卒業後、帰国してからは1年間フリーで活動していました。札幌には学生時代に何回かエキストラで来たことがあり、比較的自由に弾かせてもらったので好印象でした。タイミング良く空きがあったのでオーディションを受けて、そこにスツと収まることができました。それから30数年、いろいろありました。があつという間でした。

札幌での過去・現在・未来

札幌では多くの指揮者との出会がありました。一番印象的だったのは、ネヴィル・マリナー氏です。1回きりでしたが、その音楽性と人間性に強く惹かれました。音楽を流す力が凄かったです。オーラはあまり感じませんでした。練習からオケを乗せるのが上手な指揮者でした。

4月1日に開催した還暦記念のコンサートでは、コンサートマスターの会田莉凡さんをはじめ錚々たるメンバーが参加してくれて有難く思いました。

札幌の楽屋は特に割り振りがなくて、自分によく9番楽屋で

雑談をしていて、いつも年下にいじられています(笑)。この仕事は上下関係がないし、札幌の団員はあまり年齢の垣根がないのいいですね。

そこに集まる若い人たちの中で、還暦記念の演奏会をやらなにかという話になったのです。ヴィオラの鈴木勇人さんが中心になって進めてくれました。札幌では初めてのようですが、東京のオケではこうした企画が行っているらしいです。

会田さんと二人で演奏したヘンドルのパッサカリアは、超絶技巧の曲です。だいぶ前にロビーコンサートで弾いたことがあり、リクエストがありました。何度弾いても難しいですね。今回は技巧的な曲が多かったので、



還暦コンサートのリハーサル



師匠のロルフ＝ランケ氏とベルリンフィルハーモニーの舞台裏で



黄色い衣装は大学で上演したなんとドン・ジョヴァンニの衣装です。コントラバスは舞台上で演奏する場面があります。ちなみに来年の3月に札幌も上演します。

もしまた機会があつたら、しみじみと歌うような曲も取り上げたいと思います。札幌では、パッサカリアなどの、小編成で純度の高い曲をやりたいです。マタイ受難曲などの宗教曲も昔から大好きだからまた演奏したいですね。現代ものも割と好きですよ。

自分の特徴だと言われている速いボウイングはベルリン仕込みのものです。弓の張り具合を少し緩めにするのがポイントです。楽器は駒を高めに、弦は緩く張ります。客席から弦の振動が見えるくらい震わせると教わり、練習してきました。

料理と筋トレ

趣味はいろいろありますが、料理が好きで、家に人を集めてよく宴会をしています。それから、最近さぼっていますが筋トレも好きです。

この髪型は10年以上前からで、マンバンというものです。過去にはモヒカンだったこともあります。札幌はそういう面では自由ですね。ヨーロッパのオケにもいろんな髪型の人がいますよ。

札幌くらぶの方には、若い人



大人数で宴会しているのは留学中の僕の家です。ほぼ毎日がこんな感じでした。

速報です♪

来年5月11日(日)に「奥井理ギャラリー」でリサイタルを開催します。近くなりましたら詳しくお知らせします。ぜひ聴きにきて下さい。



(担当) 多田・中居・村山・井上・島田

トレードマークは「楽器を弾く猫達」

R(アール)弦楽四重奏団

いつも札幌の応援、ありがとうございます。

この度は、会報「札幌くらぶ」に、私を取り組んでおります弦楽四重奏団の紹介を掲載していただける事になり、とても嬉しく思います。「R(アール)弦楽四重奏団(RQ)」という名前

で、昨年11月に始動し、今年6月に第2回の演奏会を終えることが出来ました。

メンバーはコンサートマスターの隣で目を光らせているヴァイオリン副首席奏者の飯村真理さん、新日本フィル時代からの経験豊富なスキルを操るフリー奏者、坪田規子さん、本格的な家庭内紛争が勃発しない程度に意見を出し合う廣狩家(ヴィオラ

廣狩亮)の4名です。

「R」の由来は、それぞれの名前に「R」が入っていることに気付いたことから始まり、覚え易さ、リズムの良さから決めました。芸術を「アール」と発音するフランス語のニュアンスも含んでいます。

皆、弦楽四重奏が大好き？私なんて音大の副科チェロがスタートのくせに、在学中から仲間とシヨスタコフツチャシニーマンの弦楽四重奏に無謀にも挑戦していました。「巖本真理弦楽四重奏団」のチェリストだった、師である故黒沼俊夫先生の影響

かも知れません。因みにヴァイオリニスト、菅沼準二先生は主人の師匠です。



弦楽四重奏は我々弦楽器奏者の楽しみの一つです。4者が協調し、その響きは何倍にもなる。最少数の完成型だと思えます。それ故に多くの作曲家が名曲を

残し、沢山の弦楽四重奏団が存在しているのでしょう。

年齢高めのスタートですが(笑)、「まだ演奏したい曲がある」「また演奏したい曲がある」との思いで集まったRQ、これからも丁寧に真摯に音楽に向き合っていこうと思います。次回の演奏会は来年4月を予定しております。

札幌にはいくつかのアンサンブルのグループがあります。私達共々応援して頂けると嬉しいです。

「大澤敬 還暦コンサート」を聴いて

私は大澤敬さんの二十年來のファンである。大澤って誰？という人には、札幌コントラバス(以下Cb)奏者で、髪を結んでいる人と言えはわかってもらえないであろう。

ファンである理由は、演奏の様子を見ればきつと理解していただける。ボウイング(弓遣い)が実にダイナミックなのである。弦楽器の中では一番短い弓を高速で動かし、根本から先までをたつぷりと使って弾く。Cbを齧ったことがある私は知っています。弓を大きく使って弾くのは難しいのだ。特に激しく盛り

もう一つ、私達のチラシのトレードマーク、知る人ぞ知る「アマネコ」こと雨田光弘先生の描く「楽器を弾く猫達」を紹介しました。チェリストでもある先生は、奏者の特徴を素敵に描いて下さいました。RQメンバーも似て

札幌交響楽団

チェロ奏者

廣狩理栄

ドキドキは40年前に好きな女性に声をかけた時以来かも。話しかけてファンであることを伝え、このコンサートのチケットを直接購入した。話してみると彼は、腰の低い、優しい笑顔の方であった。

四月一日エイブルフル、私は

弾む心を抑え、ザ・ルーテルホールに向かった。受付にチケットを出すと、何と打楽器首席奏者の入川氏ではないか。この演奏会は共演者がコンマス会田さんをはじめ錚々たるな顔ぶれなのだが、もぎりまで豪華。

演奏は、荻凡さんの伸びやかなヴァイオリンに導かれてどれも素敵。これだけの顔ぶれだから演奏は素晴らしいに決まっている。でも、ややリラックスした感じがどの曲にもあって、それがプラスαの魅力になっていく。このくつろいだ豊かさは、大澤さんの人間性と、メンバーとの良好な信頼関係によるものであろう。下川さんの明朗自在な

司会も好印象。ただ大澤さんにとっては、ヘンデルやアンコールの曲など、



共演のメンバーたちと

技巧的な難曲も多かったためか、彼にだけは余裕があまり感じられなかった(主役だから仕方ない)。それでもダイナミックなボウイングと豊かな音楽性で、ほぼ満員の聴衆にCbの魅力伝えていたのは流石である。途中には抽選会もあり、大澤さんの似顔絵入りの煎餅などが配られていた。こういう企画も楽しいですね。

後日、この冊子に掲載されている記事のインタビューに同席したことも嬉しかった。その中にもこの演奏会の裏話があるので併せてお読みください。

会員/多田真一

「札幌くらぶ」の思い出

2003年4月に西本智美指揮による札幌くらぶコンサートでPilar大ホールで聴いたことがあった。これが第5回となっていたので札幌くらぶは90年代には既に発足していたことになる。96年発足の話を交流会で上田会長と話していたことを思い出した。札幌を支援する組織をPilarのオープン前に作り上げていたのでしょうか。

「札幌くらぶサロン」は発足当初は狸小路の喫茶店「ワイン」を会場にしていた。札幌の第1回演奏会の曲目の聴き比べがあったと記憶している。第2回は諏訪根自子が出演した第2回演奏会の録音が聴ける回でした。その場合には是が非でも参加しようと思っていたが都合がつかなかったのが今思い出して残念でならない。

サロンでの講師の任を担った竹津宜男氏は1961年札幌の創立楽団員でもあり、札幌市の音楽団体活動に大きく寄与していました。第4回から会場が札



JOFC山形大会の旅行の一コマ

幌教育文化会館4階研修室に移った。私はこの回から定期的に参加していた。教育文化会館では札幌ヴァイオリンの河邊さんとホルンの山田さんがゲストとして参加した会が続いた。河邊さんがミニコンサートでパガニーニを熱演した際は聴衆の大喝采を浴びた。札幌楽団員の演奏が豊平館に移った後もずっと続いているのは誠に喜ばしいことである。

第7回のサロン2014年6月、竹津さんが引き続き講師を務め、「札幌定期アーカイブ協奏

曲聴き比べ」でチャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番とベートーヴェンの交響曲第3番を興味深く聴いた。

この時の交流パーティーで竹津さんと親しく会話できたことは私の宝物になった。彼は私のPilar・PMFへの想いなど音楽との関わりに耳を傾け、ごく自然に人としての関係を作り出

随想 本棚の隅から 28

5月の札幌定期プログラムを受け取って「あ！パスキンだ」と思わずつぶやいた。一瞬、表紙の絵がカラーに見えた。よく見るとモノクロの写真なのに…。

「エコール・ド・パリ」の中でもパスキンが一番好きなのわたし。パスキンを知ったのは70年以上も昔になる。姉妹で購読していた「ひまわり」という少女雑誌に美術評論家の大久保泰氏が「印象派」などの絵を取り上げて解説していた。その中にパスキンもあった。

海外渡航も自由ではなかったあの頃、本物を見たいと思って、遠く遠く夢だった。雑誌で見る絵や写真に、フランスとかパリにどれほどあこがれたことか。

してくれたのです。この回のサロンが最後となって、竹津さんとお会いする機会が無くなりました。間もなくして彼の訃報を耳にしました。残念無念でした。札幌くらぶに加入して貴重な経験になったのは日本オーケストラファンクラブ協議会（JOFCC）の山形大会（2014年）と名古屋大会（2016年）に参

1920年代に松方幸次郎氏がパリで大量の「印象派」の絵画を買い、日本に美術館をつくる予定であった。太平洋戦争のためにフランスに置いたままの絵の行方は?! いかにか苦労してコレクションが返還されたのか。それは、原田マハ著「美しき愚かものたちのタブロー」に詳しい。

1958年の末になって松方コレクションがようやく返還されることになった。そして、国立西洋美術館が出来た。松方コレクション展が札幌で開催されたとき、混雑する会場で「嗚呼、これが本物か！」と足が震えたのを思い出す。私が念願のオルセー美術館とマルモッタン美術館で印象派を堪能したのは20世

加できたことです。地元会員の心からの歓迎を受け、定期演奏会も聴けて楽しく交流をすることができました。一緒に旅をした札幌くらぶの会員との交流も深まり楽しい旅でした。

会員／大井輝男

「ノモス・ガンマ」は初めて聴く曲だった。まるで体中の細胞がどんどん膨張して今にも破裂するのではないかと思つた瞬間に曲が終わって、私は爆発しなかつた！なんともクセアリスぎる作曲家だ。

紀も末になってからだだった。道立近代美術館がパスキンの絵を収集しているので、時々常設展をのぞいて、かわいい少女達を覗いているが、今回の「越境者パスキン」展ではデッサンなど、ありったけ展示されていた。

井上道義マエストロはいつも面白いので、期待は裏切られなかつた。興奮がそのまま「ポレロ」に続いた。井上マエストロが今年で引退するのは残念だけれども、思い出はいつまでも残るだろう。

第661回札幌定期は武満徹の「地平線のドーリア」と「アステリズム」、クセナキスの「ノモス・ガンマ」、そしてラヴェルの「ボレロ」だった。武満徹の曲はキタラの大ホールでの札幌の演

5月の風に乗ってアカシアの香りが流れてくる。生きていて素晴らしい。

会員／井上明子



第661回 札幌交響楽団 定期演奏会

The 661st Subscription Concert

2024年5月25日(土)、26日(日)
札幌コンサートホールKitara
May 25 and 26, 2024 at Sapporo Concert Hall, Kitara



Sapporo Symphony Orchestra

僕の愛聴盤⑩

さわやかな癒しのひととき
軽妙で弾みに弾む音符群

○コンラート・シュン第3番

変ニ長調（リスト）
ホルヘ・ボレット（ピアノ）
（86年録音）



概に浸りながら呟いていた。「素晴らしい環境のもと、名曲が生まれたのだろくな」と。事実僕の大好きな、抒情味あふれる「ペトルカ」のソネット第104番はこの地で作曲されたということである。

リストの膨大なピアノ作品集の中で、僕は深刻さを強調する楽曲やこれ見よがしのテクニクを誇示する作品、例えばソナタや超絶技巧練習曲などは苦手である。歌心にあふれた、しっとりとした肌触りに身をゆだねたいと常日ごろ願ってきた。

イタリアとスイスの国境にまたがるコモ湖は、戦前の名画「舞踏会の手帖」（ジュリアン・デュヴィヴィエ監督）の舞台ともなった第一級の観光地である。そのコモ湖畔に作曲家リストが恋の逃避行の合間に滞在した館（やかた）がたっている。そこで娘コジマが生まれ、その娘は指揮者のハンス・フォン・ビューローを経て作曲家リヒャルト・ワーグナーの妻におさまるなど、音楽史上最も生臭いスキヤンダルの主人公ともなった。

1988年6月、僕はリストの愛の巣をすぐ目の前にし、感

コンラート・シュン第3番はそんな僕の希望にうってつけのピアノ・ピースである。単純な形式ながらも、まさに「なぐさめ」の心に満ちた、そよ風に頬をなでられるような感覚が愛らしい。キューバで生まれ、アメリカに活動の場を築いた、ホルヘ・ボレットの演奏を僕は好んで聴いてきた。やや軽めに調律された楽器が、温度、湿度とも高い真夏の宵に爽やかな涼風を運んでくれる趣きである。

理屈抜きに楽しめる、癒し系音楽の代表的存在であろう。

○序曲集（ロッシニ）

リッカルド・シャイアー指揮
ナショナルフィルハーモニー
管弦楽団
（81年、84年録音）



収めたシャイアー指揮の録音がいい。いわゆるロッシニ・クレッシェンドはもとより、イタリア人にならしか備わっていないリズム感と躍動する推進力がこのディスクに限りない付加価値を添えている。

「セビリアの理髪師」序曲での26小節以下、スコアはピッコロと第1ヴァイオリンによってタタ・タタの音型を3度繰り返すことを求めている。しかしトスカニーニによって試みられた慣習を（2度目は「んタタ・タタ」）シャイアーは他の誰よりも切

こみいった問題に遭遇して心身ともに疲れはてたとき、屈託のないロッシニの音楽に救われる時がある。自らのオペラの上演に序曲を自在に使いまわすなどのこだわりのなさに加え、

軽妙で弾みに弾む旋律はこの作曲家の独壇場、スピード感あふれる楽天主義はネアカのプラス思考にもつながるのだ。ベートーヴェンとほぼ同じ時代に、正反対の芸風として聴衆を興奮の坩堝に巻き込んだことは容易に想像できる。

生涯に39のオペラを書いたものの、一部を除いて、今日では序曲だけが多くの演奏機会を得ているようである。そんな中「セビリアの理髪師」「セミラーミデ」「ウィリアム・テル」などを

「セビリアの理髪師」序曲での26小節以下、スコアはピッコロと第1ヴァイオリンによってタタ・タタの音型を3度繰り返すことを求めている。しかしトスカニーニによって試みられた慣習を（2度目は「んタタ・タタ」）シャイアーは他の誰よりも切

れ味するどく再現している。ここでも指揮者のセンスが光る。ロッシニ音楽の魅力倍増である。

独自の語法を持った作曲家としてのロッシニ、37歳で作曲の筆を折り、人生後半の40年近くをグルメ三昧で過ごした規格外の怪物ロッシニ、シャイアーのディスクを聴きながら様々な思いを駆け巡らせるのは僕だけだろうか。

会員／村岡範男

心に残る音楽会

私は、演奏者の「人柄が滲み出る音楽会」が大好きです。AI作曲の音楽・演奏は、凄いとすら思うけれど、まだまだ馴染めません。直ぐに私の嗜好を超えたAIの音楽が現れて魅了される時代が来るかも知れませんが…。今は人間の音楽の方が好きです。

最近で心に残った音楽会。それは毎回の「札幌くらぶサロン」演奏会。高いレベル・迫真の演奏を身近に聞くことが出来て、思わず拍手にも力が入ります。

若いころ私は日本武道館でア

会員／松本良一

スタッフの声

▼公開されてからロングランを続けてきた怪獣映画「ゴジラマイナスワン」を観てきた。昭和史とゴジラを結びつける視点に興味があったのと、この映画を観て「泣いた」と言う紳士諸氏の意外な反応に刺激を受けたのもある。さて私は泣くのだろうか？ あのテーマ曲が鳴り響き出したクライマックス、妙に嬉しくなっていた私の視界に「アッ」と。ここからはスクリーンに釘付け。気がつくのと大粒の涙の中に入った。（島田）

▼昨年の正月にTVを買換えると、YouTubeを見られるようになりモリコネのニューシネマパラダイスとミッションのメインテーマを良く聞いている。ヴェネチアのサン・マルコ広場での演奏会でモリコネの指揮。ミッションのメインテーマは合唱が入る。このバージョンは知らなかったが、偶然TVで解説をしていて、なるほどと理解する。行ったことのあるサン・マルコ広場を思い出しながら聞く感慨もひとしおです。（神）